

（2022.9.14）

1980年代に日本で話題になった『パパラギ』という書籍がある。ヨーロッパを訪問した南洋の小島の首長ツイアビの回想という仕立ての痛烈な文明批判で、パパラギは西洋の人間という意味である。各国で翻訳され、日本で約百万部、世界全体では数百万部が出版された。原本は1920年にドイツで出版され、種明かしをすれば偽書である。

そこに「パパラギにはひまがない」という一章がある。一部を紹介すると、パパラギは一日を細分して計画し、時間を表示する機械を手首に装着し、それを横目に「時間が無い」と、あくせく仕事を処理していく。たまに空白の時間ができると、あわてて無用の仕事で穴埋めをして安心している、という具合である。

チャプリンの映画『モダン・タイムス』の冒頭を想起させるような光景であるが、これは過去の現象ではなく、最近、それを象徴する言葉が話題になりつつある。「時間貧困」である。OECDは余暇活動や気分転換の時間が平均の6割未満の人々を時間貧困と定義しているが、過去30年間で大半の国々で比率が増加している。

とりわけ日本は顕著で、G7の国々を対象にした調査で、日本は仕事や通勤の時間は最短のイタリアの2倍で最長である一方、余暇や団欒の時間は最長のドイツの8割程度で最短である。この相違の根本は、西欧では労働（レイバー）と奴隷（スレーブ）は語源が同一とされ、仕事はできれば回避したい行動というところにある。

それ以外に日本特有の事情もある。日本では三大都市圏域に企業の五四%、就業者数の四七%が集中し、人々は相当の時間を通勤に使用し、自由になる時間を犠牲にしている。さらに就業する女性が増加したが、育児や家事を外注することに抵抗があるため、夫婦や個人で対応する傾向にあり、結果として自由時間が蚕食される。

それ以上に自由時間を圧迫しはじめたのがインターネットの定額料金制度である。電話は従量料金制度であったから使用時間を制約する圧力があつたが、定額料金であれば時間を心配する必要がなくなった。実際、日本人全世代のインターネット利用時間は2016年の1日100分から2020年には168分に急増している。

これは宅配サービスのように買物時間を節約してくれる利用もあるが、自由時間を収奪する利用も登場させてきた。サブスクリプション・サービスと総称されるビジネスである。一定の制限はあるものの映画や音楽や新聞を自由に享受できる仕組みで、過去5年で日本の市場規模は1.6倍に拡大している。

ここから連想されるのがドイツの作家M・エンデの名作『モモ』である。ある都市に灰色の洋服の人間が何人も登場して人々に自分の使用する時間を節約して時間貯蓄銀行に貯蓄すると利息が獲得できると宣伝する。多数の人々が時間を節約した結果、社会から無駄な会話や行動が消滅し、無味乾燥な社会になっていく。

そこに登場した正体不明の少女モモが時間貯蓄倉庫を解放して凍結されていた時間を解放し、以前の活気ある社会が復活するという物語である。インターネットが出現させた現在の情報社会では、人々はサブスクリプション・サービスに時間を吸収され、時間貧困に遭遇している状態にある。自身の内部にモモを発見し、この貧困から脱却する必要がある。